

つなげる、あるいは線をそえてみる

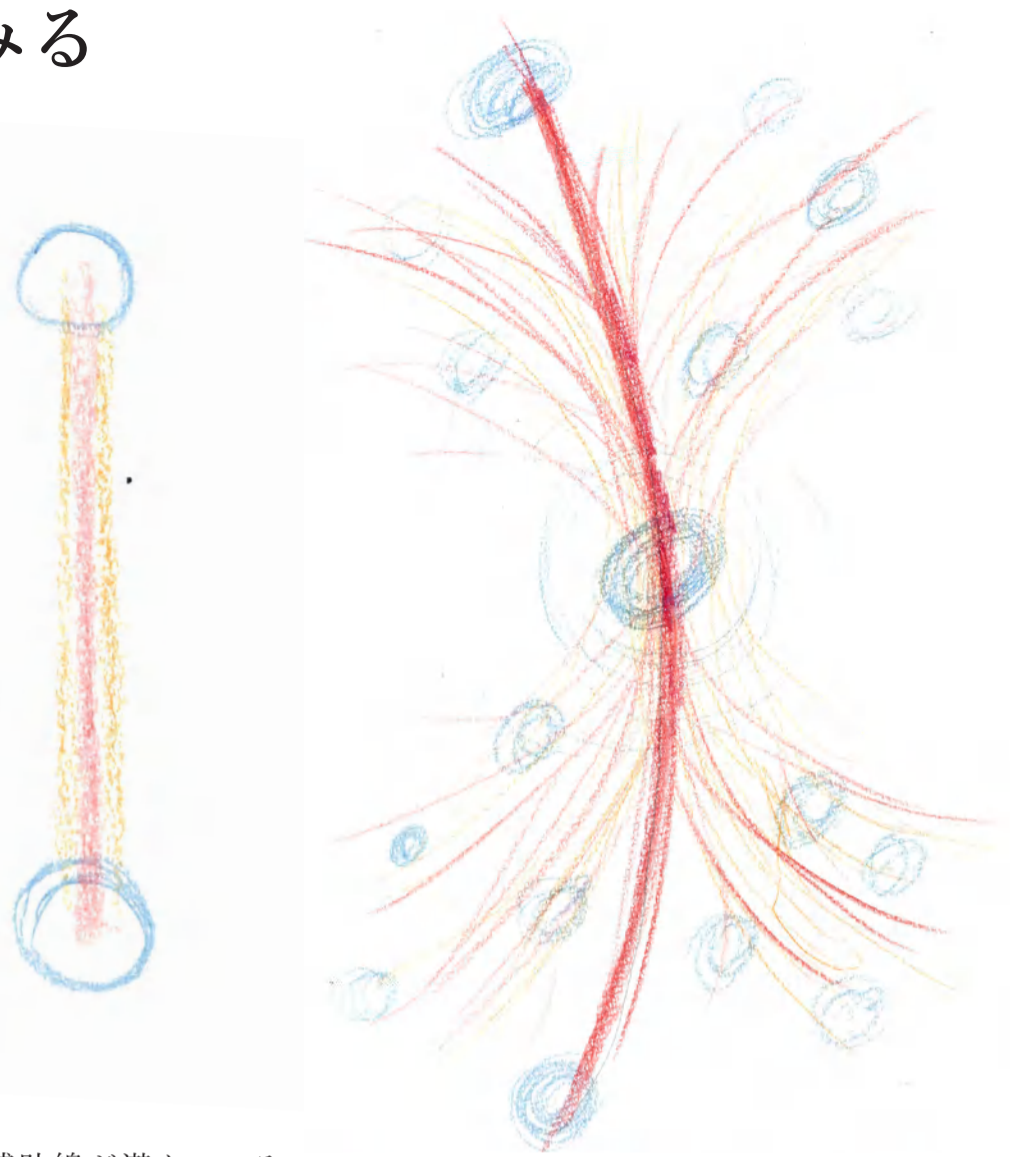
①線でつながるといふこと

この場所では、点をつなぐ行為が求められている。
そっと手を添えるように、そこに一本の線を置くことで、ミュージアムロードは人々の内側にイメージとして立ち上がる。

このまちは、魅力的で多様なもので満ちている。
そこに息づく人々の営みも、訪れる理由も、通り抜ける意味もまた多様である。
まちとは舞台であり、生活や文化を受け止める器だ。

ミュージアムロード周辺には、象徴的な美術館たち、歴史的建造物、公共施設、アーチの美しい高架下などが連なり、無数の言語とデザイン、芸術が散在している。
今このまちに求められているのは、それらを刷新することでも、巨大なオブジェクトを挿入することでもない。
散らばった点を、純粹で素朴な「つなぐ」という行為によって結び直すことだ。

線を引くことで、点はより一層輝きを増す。
人々の生活にそっと線を添え、舞台を与える。
この提案は、そのための静かな装置である



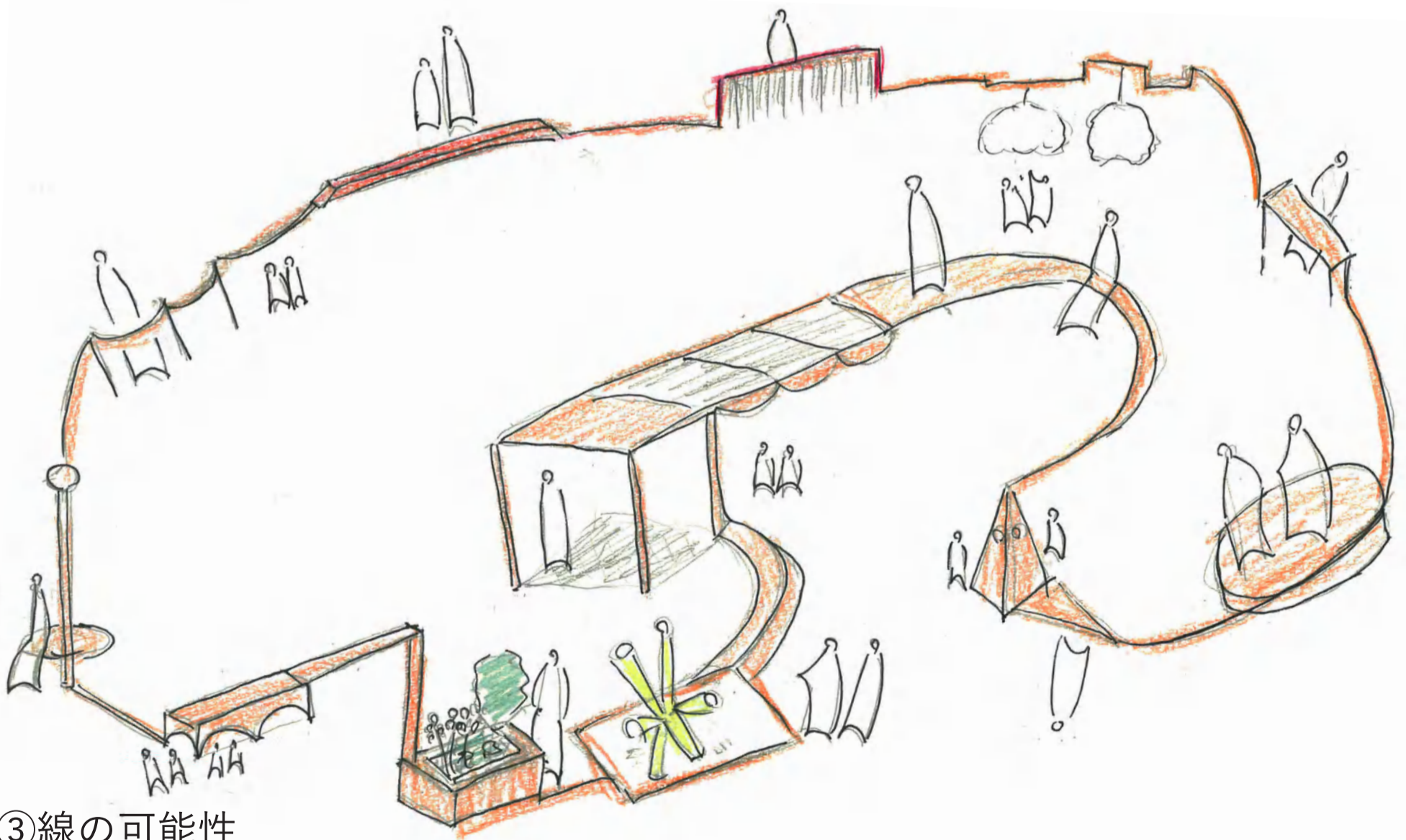
②点字ブロックに線をそえる



都市の中には、数えきれないほどの補助線が潜んでいる。
緑石、車線、ガードレール、ベンチ、手すり。そのなかでも、ひときわ人に寄り添い目を引く線がある。点字ブロックだ。

まっすぐに伸びる福祉の補助線は、空間に強い印象を与える。
それは制約ではなく、私はむしろポジティブな力だと信じている。

この提案は、点字ブロックを「つなぐ」ことから始まる。
福祉の線を一本通すことで、日常の中で人は孤独ではないことに気づく。
同じように、そこに赤い線をそえる。
人々は意識することなく、その線を辿り、いつのまにかミュージアムロードと結ばれていく。



③線の可能性

線は、広がりを生み出す。時に面となり、時に点にもなる。

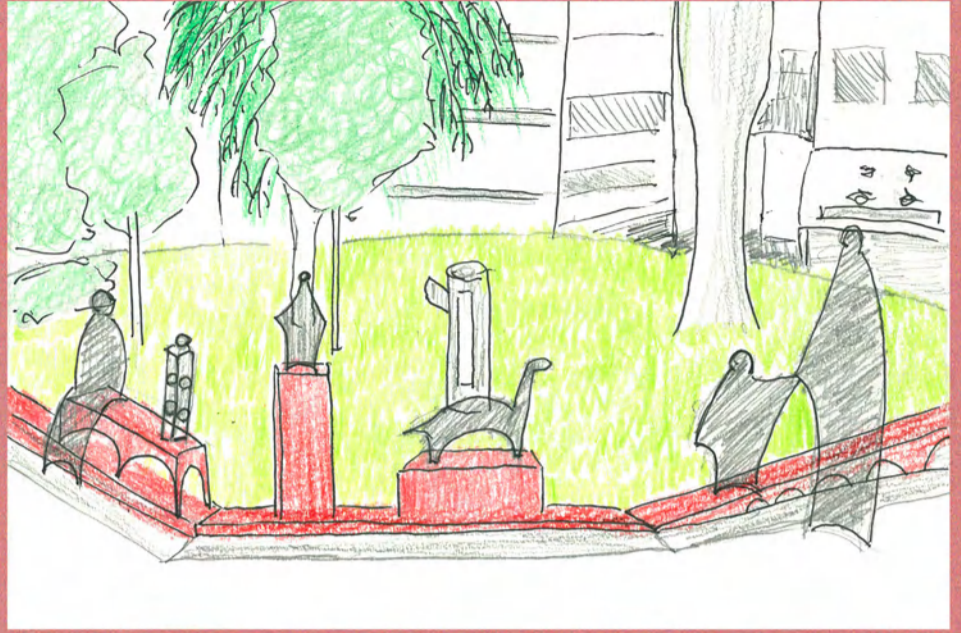
都市に潜む多様な補助線と呼応しながら、線はかたちを変え、ミュージアムロードをつないでいく。

それは手すりとなり、つるものとなり、そこから生まれる面のなかで、人々は無意識のうちに「つながり」を感じるだろう。

ふと視線を上げた先に、どこまでも続く一本の線がある。

それは視界をひらき、ミュージアムロードを越えて、エリア全体をやさしく包み込んでいく。

④かたちを変えて寄り添う線たち (1)



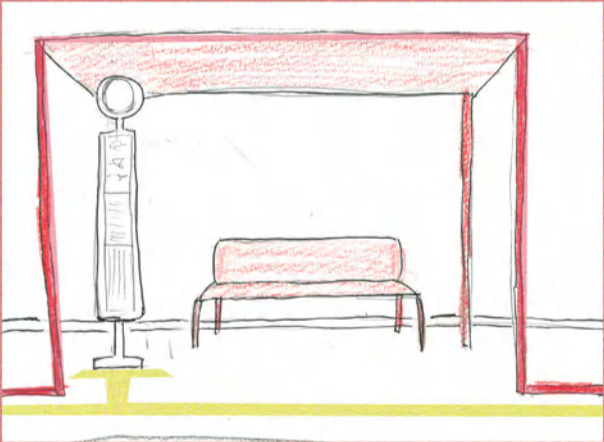
線は平面にかたちを変えて、短期間の作品設置のための台座やベンチとなる。



線は人と自然に寄り添い、植木鉢とベンチになった。



イベント時には作品のフレームへと形を変える。

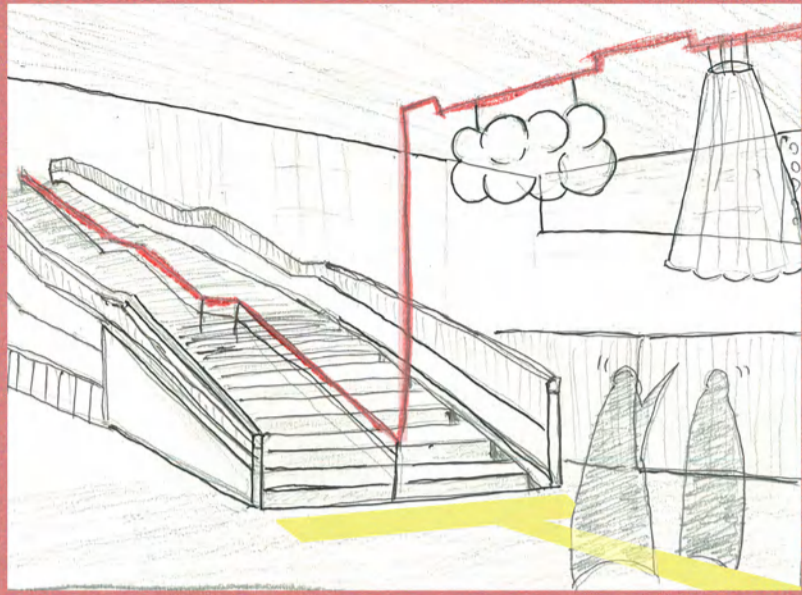


そこで待つ人にもそこに訪れる人にも静かに寄り添う

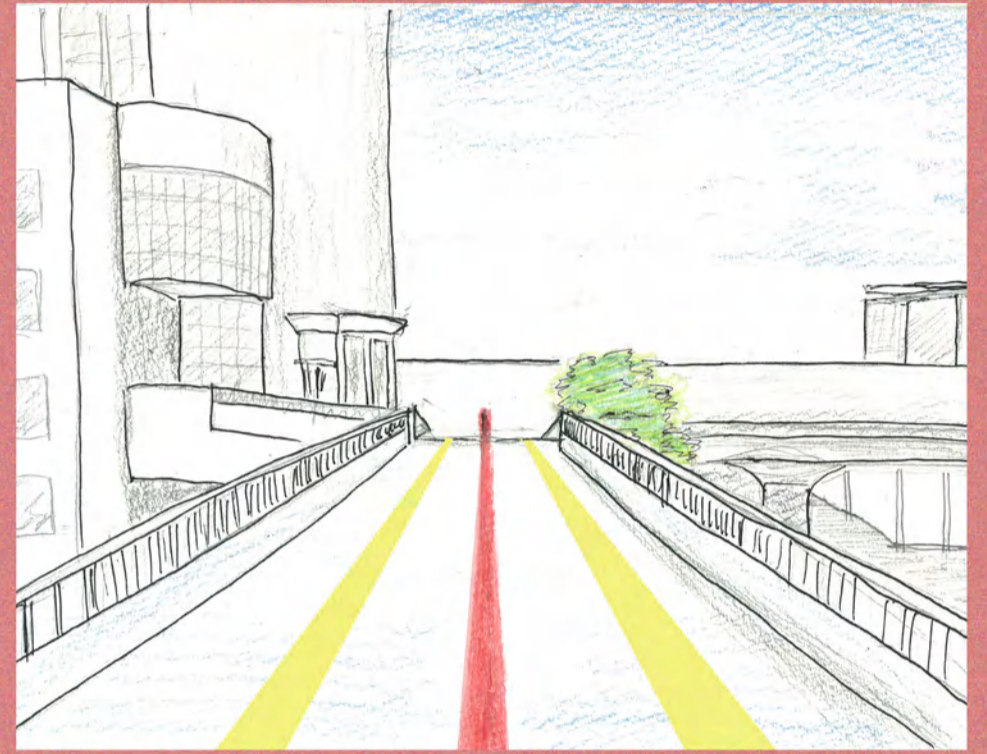


高さの違う線は、様々な人々に寄り添うことができる。

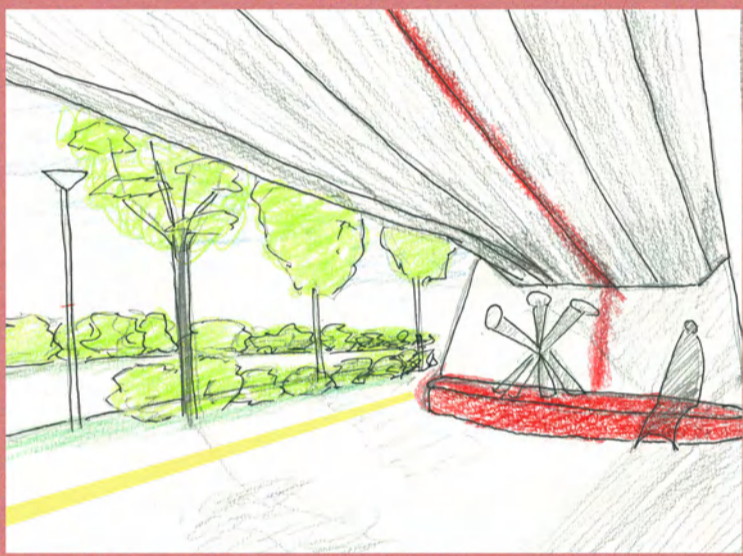
⑤かたちを変えて寄り添う線たち (2)



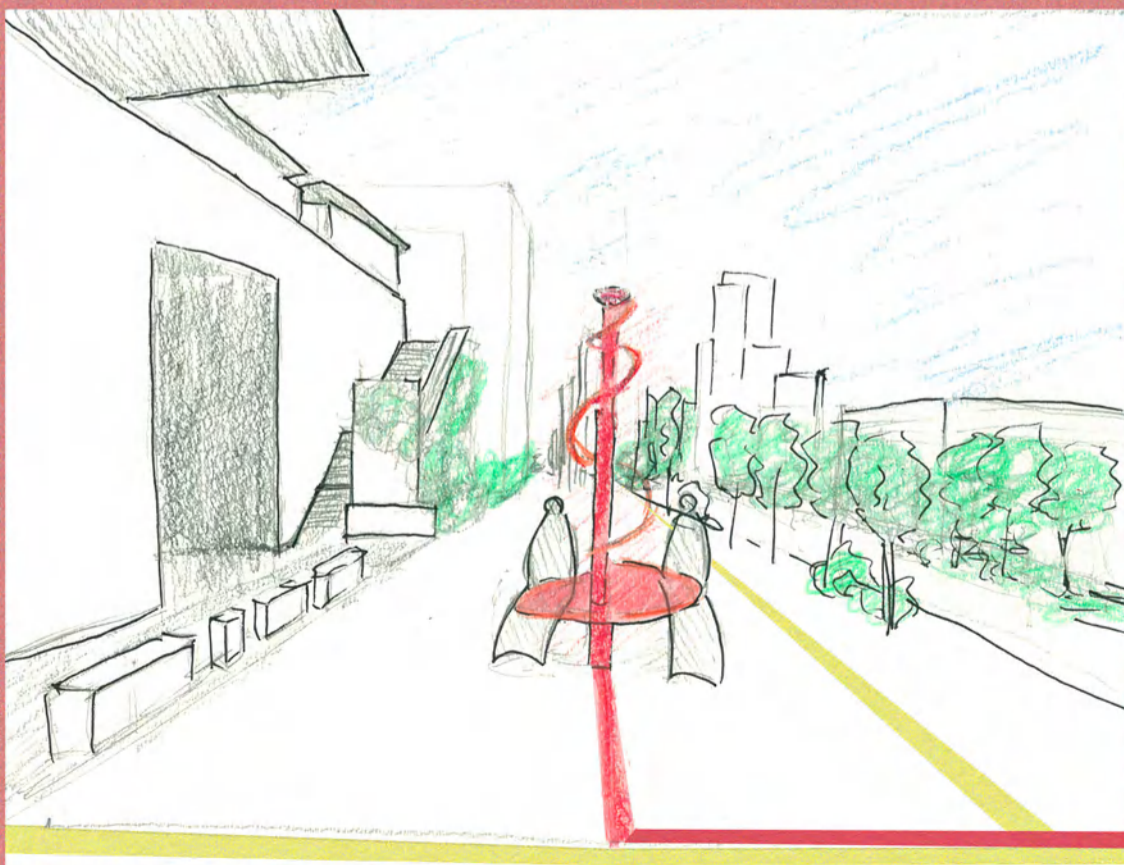
手すりから上へと延びた線が、立体作品の補助装置となる。



どこまでもいつまでも続いているように見える。



面は台座、ベンチ、ステージとなりえる。



いつしかそれは目印となる。